

原著論文

函館大妻高等学校所蔵の外山ハツによる刺繍作品

中川麻子

大妻女子大学家政学部被服学科

Embroidery Works by Hatsu Toyama, Hakodate Otsuma High School Collection

Asako Nakagawa

Key Words: 函館大妻技芸学校, 外山ハツ, 大妻技芸学校, 大妻コタカ, 美術刺繍

要旨

本稿は、函館大妻技芸学校所蔵の手芸作品、特に創立者である外山ハツの刺繍作品 7 点を取り上げ、初期大妻手芸教育における刺繍課程についての手がかりとすることを目的に、刺繍技法と作風の概説と署名・落款風刺繍から各作品の制作年推定を行った。

まず 7 点の作品について、技法、作風の概説を行った。次に 5 点の署名・落款風刺繍については、書体と文字レイアウトからこれを 3 パターンに分けることができた。この署名・落款風刺繍と、すでに制作年が分かっている作品を表にした。作風の比較から、外山ハツの刺繍作品は、細手の絹糸を用いた緻密な刺繍による絢爛な作風と、太い糸と大きな針目を使った力強くダイナミックな作風に分かれることを明らかとした。さらに署名・落款刺繍と他作品との比較から、大正時代末期頃までは細手で緻密な刺繍、函館大妻開校後の昭和時代にかけて、太い糸を用いた作風に移行したと結論づけた。さらにこれまで制作年不明だった作品については、作風および署名・落款風刺繍のスタイルから制作年代を推定した。また外山ハツの刺繍作品から、大妻技芸学校において輸出用美術刺繍に携わる人物が刺繍教育を行っていた可能性が高いことを明らかにした。

1. はじめに

函館大妻技芸学校（現・函館大妻高等学校、以下「函館大妻」と略）は、大妻技芸学校（現・大妻女子大学）の卒業生である外山ハツが、大正 13 年に創立した女子学校である（表 1）¹。筆者は 2015 年

から函館大妻高等学校所蔵の手芸作品調査を開始し、これまでに同校が大妻技芸学校の手芸課程を受け継ぎ、初期大妻手芸教育に関する作品を所蔵していることを明らかにした。また同校が、創立者外山ハツの大妻技芸学校卒業作品を所蔵していることを報告した²。

本稿は、2016 年 8 月の追加調査の報告であるが、特に創立者である外山ハツの刺繍作品に焦点をあてる。外山ハツによる刺繍作品は、いずれも絵画的図案を高度な刺繍技術で表現した「美術刺繍」と呼ばれるもので、明治時代中期から大正時代にかけて盛んに制作されていた作品分野である³。明治時代に創立された共立女子職業学校（現・共立女子大学）、女子美術学校（現・女子美術大学）などで美術刺繍教育が行われていたことはすでに知られていた。しかし、大妻女子大学では資料・現存作品が確認できないことから、大正 5 年創立の大妻技芸学校では美術刺繍教育はされず、創立当初から家庭的かつ実用的な刺繍技法のみが教授されたと考えられてきた。だが、外山ハツの卒業制作品によって、大妻技芸学校でも美術刺繍が課程に組み込まれていたことが明らかとなった。このことは、初期大妻手芸教育において、非常に高度な刺繍教育が行われていたことを示しており重要である。

本稿では外山ハツの刺繍作品 7 点を取り上げ、技法と作風の概説と署名・落款風刺繍から各作品の制作年推定を試み、初期大妻手芸教育における刺繍課程についての手がかりとすることを目的とする。

表 1 外山ハツ関連年表（グレー部分は千代田の大妻技芸学校関連）

年	出来事
1893 (明治 26) 年	外山ハツ 函館にて生誕
1908 (明治 41) 年	(千代田) 大妻コタカ 裁縫・手芸の家塾を開設
1913 (大正 2) 年	函館裁縫女学校本科 (3 年) 卒業 (20 歳)
1916 (大正 5) 年	(千代田) 私立大妻技芸伝習所設置 (各種学校)
1917 (大正 6) 年	(千代田) 私立大妻技芸伝習所を私立大妻技芸学校に名称変更
1919 (大正 8) 年	外山ハツ上京、千代田の大妻技芸学校高等科入学 (外山ハツ 26 歳)
1921 (大正 10) 年	(千代田) 私立大妻実科高等女学校を私立大妻高等女学校に組織変更
1922 (大正 11) 年	千代田の大妻技芸学校 (第二部) 助教諭として勤務 (外山ハツ 29 歳)
1922 (大正 12) 年	関東大震災を機に外山ハツ帰郷 (外山ハツ 30 歳)
1924 (大正 13) 年	大妻コタカより分校創立承認を得る (外山ハツ 31 歳)
	函館大妻技芸学校 (蓬莱町仮校舎) 開校
1925 (大正 14) 年	松風町新校舎移転 (外山ハツ 32 歳)
1926 (大正 15) 年	第一回卒業式、第一期生 118 人
1932 (昭和 7) 年	函館大妻女子高等技芸学校へ改称 (外山ハツ 39 歳)
1948 (昭和 23) 年	函館大妻学園 函館大妻技芸高等学校へ改称 (外山ハツ 55 歳)
1973 (昭和 48) 年	創立 50 周年式典 (外山ハツ 80 歳)
1983 (昭和 58) 年	外山ハツ逝去 (享年 90 歳)

2. 外山ハツ刺繍作品概説

作品 1 「櫻下の孔雀刺繍額」落款あり、大正 11 年頃制作

外山ハツが大妻技芸学校の卒業作品として大正 11 年頃に制作したものである。つがいの孔雀が桜の枝に立つ姿を、艶のある絹糸を用いて精緻に刺繍している。孔雀を囲む桜花が華やかであり、まさに大正時代特有の浪漫趣味を感じさせる秀作である。現在は額装され、函館大妻高等学校に飾られている (図 1)。

作品 2 「猿と柿刺繍額」落款あり、制作年不明

柿の木の上に母猿と 2 匹の子猿が寄り添っている。背中側に座る子猿は、母猿の毛繕いをしている。母猿は手にオレンジ色の柿の実を握っており、胸に抱かれた子猿がその小片を持っている。母猿のリラックスした肢体、柔らかな表情から、親子のゆったりとした寛いだ雰囲気が伝わってくる。

猿の毛は、非常に細い絹糸によって、丹念に精密に刺されている。全体に刺し縫いした後に、さ



図 1 櫻下の孔雀刺繍額

らに細い糸で毛流れを刺繍することで、冬毛になった猿のふさふさとした毛並みをたっぷりと表現している (図 2)。



図2 猿と柿刺繍額



図3 白鷺と薄刺繍額

作品3 「白鷺と柳刺繍額」落款なし、大正15年頃制作

2羽の白鷺が木の上に佇んでいる。左側の鷺は長い首を持ち上げ遠方を見る。右の1羽は身をすくめてこちらを見ている。白い羽は細い絹糸でみっちり刺繍されている。頭から身体にかけては刺し縫い、羽の先端は割り縫いでふっくらとした絹糸の艶を活かして表現されている。脚はやや太めの糸に撚りをかけ、すっきりと力強く刺しているのが、白い羽と対象的である。鷺の表情は、どこかユーモラスである(図3)。

これまで本作品の制作年代は不詳であった。しかし今回の調査によって、大正15年3月の『第二回卒業記念帖』に、本作品と思われる作品が撮影されていることを発見した。写真では手芸裁縫作品を展示している部屋の一番奥に、衝立または額装されて展示されている(図4)。2羽の鷺の姿と枝の形から、本作品であることは間違いないだろう。この資料によって、本作品は遅くとも大正15年3月までに制作されたものであることが明らかとなった。

作品4 「白牡丹刺繍額」制作年不明

深緑から淡い緑色までのグラデーションの絹糸で刺繍した葉と蕾は、絹糸の艶を最大限に活かした滑らかな質感である。これに対して、爛漫と咲く白牡丹の花びらは、艶をやや抑えた白絹糸を刺し縫いすることで、牡丹の花びら特有の柔らかな質感を見事に表現している。花卉は相良縫いで立体的に表している。絹地に刺繍した布地を額装した小作品であるが、端正な縫いと刺繍技法の使い分けの様子など、



図4 古写真、函館大妻技芸学校「第二回卒業記念帖」大正15年3月出版



図5 白牡丹刺繍額

外山ハツの卓越した刺繍技術を表す作品である (図 5)。

作品 5 「雌雄鶏刺繍額」 落款あり、制作年不明

艶のある絹糸の長所を活かして、滑らかな羽に覆われた雌雄の鶏を表現している。羽には白絹糸のみで縫い目の方向を丁寧に変えることで、鶏特有のふっくらとした肉厚の羽毛を表現している。使用した糸は白一色であるにもかかわらず、絹糸の艶を最大限に活かしたことで、白から銀色への自然なグラデーションが生じている。雄鶏の黒い飾り背羽が堂々とし、画面の中心を引き締めている。鶏の頭部、トサカ、表情など緻密で写実的に刺繍されており、作品全体の品位を高めている。画面右側に添えられた白い花は、葉と茎が淡い銀色で刺繍されているが、もとは緑がかった色糸だったのが褪色したのだろう。鶏の足元には、うっすらと若草色の草で覆われた地面の様子が、粗めの糸で刺繍されている (図 6)。

作品 6 「鶉と秋草刺繍掛軸」 落款あり、制作年不明

水辺に佇む 2 羽の鶉を刺繍した掛軸である。傍らに咲く白い小菊と薄が初秋の風情を感じさせる。2 羽の鶉はそれぞれ左右を向き、1 羽は毛を繕い、もう 1 羽は彼方を見つめている。鶉の羽毛は、濃茶から薄茶の絹糸を用いて、羽根をかたどるように丁寧に刺繍されている。頭部は相良縫いによって立体的に、また顔から胸毛にかけてはごく細い糸で針目を感じさせないほど緻密に表現されている。鶉特有の小さくふっくらとした躯体の特徴を、刺繍だけで見事に表し、遠目で見ると静謐な日本画のようである。足元の刺繍は、薄く絵の具を塗った上に刺繍糸を粗めに渡して地面とし、その周囲は寄せる静かな波を白と薄い水色の刺繍糸で表している。背景にかけたも、うっすらと絵の具で色がつけられており、



図 7 鶉と秋草刺繍掛軸

画面全体に奥行きを感じさせる演出がされている (図 7)。

作品 7 「鷹と松刺繍額」 落款あり、制作年不明

雄々しい鷹が松の木から飛び立つ瞬間を描いたのだろうか。鷹の腹部が露わとなり縮こめた脚先が見える。腹部は灰色のやや太めの刺繍糸を粗めに刺繍することで、ふっくらとした毛並みを表現している。鷹の眼光は鋭く、獲物めがけて飛び立つ様を表しているのだろう。また松の樹皮も外山ハツ作品にしては太めの糸を用い、松の葉は強撚りの糸で直線的に表現している。この作品で目をひくのは、大きく広げられた白い羽根である。広げた翼と尾羽根は、かなり細い純白の刺繍糸で緻密に刺繍されており見事であるが、やや粗めに表現された頭部、腹部に対比するとやや異質な印象である。本作品は、背景の松の木を抑え気味に表現し、また鷹の頭部と腹部を力強い針目で刺繍することで、白い翼の豪華さ



図 6 雌雄鶏刺繍額



図 8 鷹と松刺繍額

を際立たせるよう配慮したものと考えられる (図8)。

3. 署名・落款風刺繍の比較と作品の制作年代推定

前述した7作品のうち5点に署名と落款風の刺繍がされていた。作品に落款を残すのは作品が完成した証明のためであり、日本画や書では一般的に行われている。明治時代の美術刺繍分野でも、作家性が重視されるようになる明治時代後期から署名や落款を刺繍した作品が現れ始める⁴。大正時代に美術刺繍教育の中心的な機関であった女子美術学校の卒業制作作品では、生徒名を刺繍することが慣習化された⁵。これは当時、刺繍が絵画と同様の美術的価値があると考えられていたことを示している。

書画の制作年代確定に署名と落款が利用されることは多い。本稿もこれに倣い、制作年代の推定を試みる。方法としては、すでに制作年代が確定している刺繍作品を軸に、署名・落款風刺繍の種類、刺繍技法および作風から考察を行った。

今回取り上げた7点のうち、5点に署名・落款刺繍がされていた。いずれも本名の「ハツ」に「子」を足してある。平仮名の名前を漢字にしたり、「子」をつける名前のアレンジは当時よく行われていた。

外山ハツの署名・落款刺繍は次の3種類に分けることができた。パターン1は「はつ子」と平仮名と漢字で署名刺繍し、その下に左横書きの「外山」を落款風に刺したものである (図9、10)。パターン

2は「葉津子」と漢字で名前を表記し、下に右横書きの「外山」の落款風刺繍をしている (図11、12)。パターン3は、同じく「葉津子」と漢字で表記した下に「外山」を縦書きの落款風刺繍にしている (図13)。

パターン1の刺繍がされているのは、作品1と2である。制作年代が明確な作品1に刺繍されていることから、この落款が大正11年頃から使われていたことがわかる。また「はつ」と平仮名で表記していることから、3つのパターンのうち最も初期のものだと考えられる。

パターン2の署名・落款風刺繍が刺繍されている

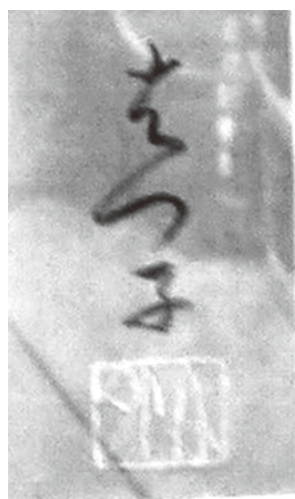


図10 作品2 (パターン1)

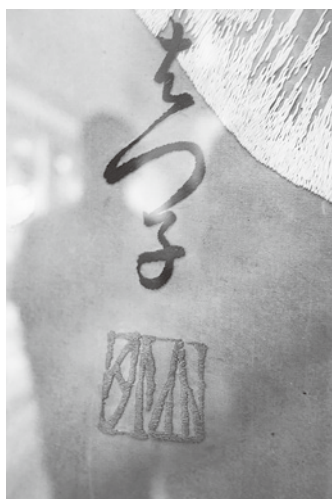


図9 作品1 (パターン1)

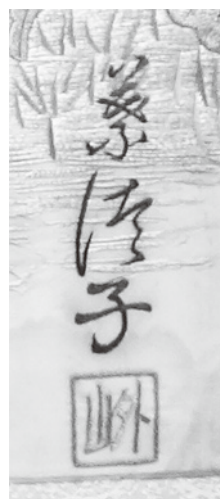


図11 作品5 (パターン2)

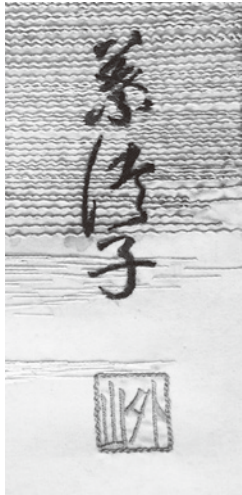


図 12 作品 6 (パターン 2)

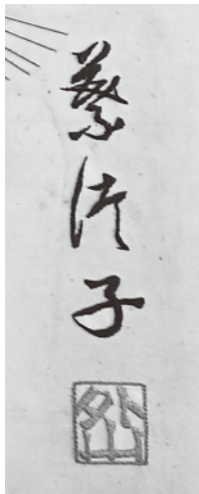


図 13 作品 7 (パターン 3)

のは作品 5、6 の 2 点である。作品 5 は、鶏の白い羽根の表現が緻密を極め秀逸である。糸の撚り方、針目の方向、しっとりとした艶を湛えた絹糸の表情など、円熟味を増した高度な刺繍技法が見える。これに比べると、同じくパターン 2 の刺繍がある作品 6 は、鶏の羽根、表情、脚先の表現は細やかであるが、背景の薄と地面に使用した刺繍糸は太めで、刺繍の目もやや荒い。また地面にうっすらと絵の具による着彩が見られる。これは前稿で取り上げた外山ハツと教員の共同作品である「金閣寺」「銀閣寺」(昭和 33 年頃制作)と共通の表現方法である⁶。地に着彩することで、画面に遠近感と透明感を与え、

より絵画的な仕上がりが増し、また時間を短縮することができる。以上のことを踏まえ、作品 6 は作品 5 よりも後に制作されたと推察した。

パターン 3 が刺繍された作品 7 は、白い羽根の表現が緻密ではあるが、鷹の表情に使用した糸は太く針目も大きい。また松の葉も以前のような繊細優美な表現ではなく、一針で深く刺している。大正 11 年頃制作の作品 1 (孔雀刺繍) のような滑らかで緻密な表現から離れ、太めの糸を効果的に使ったより力強く緊張感のある画風に向かっているように見える。作品 1 と大正 15 年頃制作の作品 3 と比べてみても作風が大きく異なるため、本稿で取り上げた 6 作品のうち、最も後期に制作されたものと推定した。

以上の制作年代推定を表にまとめた(表 2)。署名・落款風刺繍がなく、制作年代も不明の作品 4 については、茎と葉に用いられた刺繍糸の細さ、滑らかさ、緻密さから、大正時代後期の作品 1～4 とほぼ同時期に制作されたと推定した。本作品は小型であること、また落款風刺繍もないことから、大妻技芸学校時代の習作である可能性も高い。

4. おわりに

現存するハツの刺繍作品は、鳥、動物、花を題材にしたものが多いが、特に鳥が突出して多いことがわかる。これは緻密で滑らかな刺繍を得意としたハツが、自身の刺繍技量を存分に発揮することができる格好の図案であったからと考えられる。また、鳥、動物、花は、明治時代の美術刺繍分野でも好まれた題材である。羽根や体毛の表現、表情(眼やくちばし等)の刺繍技法、絹糸の艶を重視した表現方法など、明治時代後期の美術刺繍作品と似たものが多かった。特に作品 1 は、明治時代後期から末期にかけて、海外輸出用として人気のあった孔雀刺繍と構図が似ている。このことから、ハツが刺繍の教えを受けたのは、輸出用美術刺繍を手がけた人物であった可能性がある。つまり創立当初の大妻技芸学校では、美術刺繍職人が刺繍の教員をしていた可能性が高い。

外山ハツの刺繍作品によって、千代田の大妻技芸学校において高度な美術刺繍教育が行われていたことが明らかとなった。また、函館大妻においては、昭和時代になっても外山ハツによる美術刺繍教育が実施されていたことも分かった。大正時代以降、それまで美術刺繍を行っていた女子教育機関でも、

表 2 外山ハツ刺繍作品リスト

作品番号	制作年	図版	署名・落款刺繍	作品名	作品形式	作風
1	大正 11 年制作			パターン 1 桜下の孔雀刺繍額	額装	非常に緻密 細い絹糸 滑らかな質感
2	不明			パターン 1 猿と柿刺繍額	額装	非常に緻密 細い絹糸 滑らかな質感
3	大正 15 年 3 月 までに制作 (['第二回卒業 記念帖']に掲 載)		なし	白鷺と薄刺繍額	額装	非常に緻密 細い絹糸 滑らかな質感
4	不明 (大正時代末期 ~昭和時代初 期か?)		なし	白牡丹刺繍額	額装	非常に緻密 細い絹糸 滑らかな質感 少し太め甘捩り の絹糸
5	不明 (大正時代末期 ~昭和時代初 期か?)			パターン 2 雌雄鶏刺繍額	額装	非常に緻密 細い絹糸 滑らかな質感
6	不明 (昭和時代前期 か?)			パターン 2 鶉と秋草刺繍掛軸	掛軸	鶉の羽根は緻密 細い絹糸 太めの糸も使用 地面の表現がやや粗め
7	不明 (昭和時代前期 か?)			パターン 3 鷹と松刺繍額	額装	鷹の白い羽は緻密で滑らか 鷹の表情は太い糸でやや粗め 松の樹木、葉の表現は粗め

徐々にフランス刺繍やリボン刺繍といった装飾に適した実用刺繍中心へ移行していった。このため大正時代以降も継続して美術刺繍教育を実施した教育機関は少ない。函館大妻では実用刺繍教育も行いながら、その一方で、昭和時代になっても教員と生徒によって美術刺繍作品の制作を続けられたのは、女子の刺繍教育の中でも貴重な例である。

以上から、次の結果を得た。

1. これまで制作年不明だった作品3「白鷺と柳刺繍額」が、遅くとも大正15年までに制作されたことが分かった。

2. 外山ハツの署名・落款風刺繍は3つパターンに大別できた。

3. 署名・落款風刺繍、刺繍技法、作風から、外山ハツによる刺繍作品をリスト化し、制作年代推定を行った。

4. 外山ハツの刺繍作品は、細手の絹糸を用いた緻密な刺繍による絢爛な作風と、太めの糸と大きめの針目を使った力強くダイナミックな作風に分かれることを明らかとした。さらに署名・落款刺繍と他作品との比較から、大正時代末期頃までは細手で緻密な刺繍、函館大妻開校後の昭和時代にかけて、太い糸を用いた作風に移行したと結論づけた。

5. 外山ハツは一貫して美術刺繍作品を制作していた。また題材は花鳥図案が多く、その技法も明治時代の美術刺繍業者が行っていたのと同種のものであった。このため、創立当初の大妻技芸学校では、輸出用美術刺繍に携わる人物が刺繍教育を行っていた可能性が高い。

函館大妻所蔵の刺繍作品の制作年代を確定させるには、さらに同校の同窓会誌、同窓生のインタビュー等によって裏付けを行う必要がある。外山ハツの作風は、その滑らかな絹糸の使い方が特徴であるが、この高い美術刺繍の技法をどのように体得したのか詳細はまだ明らかでない。千代田の大妻技芸学校における刺繍教育の全容把握に向け、今後も調査を継続する。

謝辞

本調査にあたり、学校法人函館大妻学園函館大妻

高等学校の西野鷹志理事長、池田延己先生のご協力と貴重なご助言をいただきました。ここに感謝申し上げます。

本研究はJSPS科研費JP16K01197、JP15K01927の助成を受けたものです。

注

- 1 年表の出来事および外山ハツの年齢については、『創立70周年記念一針一心道を拓く』、学校法人函館大妻学園函館大妻高等学校、平成5年、巻末年表および同校HP年表を参考にした。
- 2 中川麻子「函館大妻技芸学校の手芸教育」家政系研究紀要、第52号、2016年、13-22頁。
- 3 宮内序三の丸尚蔵館「美術染織の精華—織・染・繡による明治の室内装飾」平成23年の展覧会では「国内外の展覧会、博覧会に絵画的な図様を染織の技術で表した掛幅や額の作品が登場して高い評価を得るようになりました。(中略)「装飾品としての染織作品—美術染織の制作が盛んになったのです」と説明している。本論では、美術染織の中でも「美術刺繍」とは「高度で精密な刺繍によって絵画的図案を表現し、観賞用の作品として制作したもの」と定義する。
- 4 明治時代、日本の美術染織作品は海外万博に出品され、高い評価を得ていた。1900(明治30)年に開催されたパリ万博では、染織作品を出品する際には、出品者だけでなく、作家本人の指名を明記するように指示された。これをきっかけに、明治時代後期以降、美術刺繍作品に作家名の署名・落款刺繍がされるようになった。農商務省『千九百年巴里万国博覧会臨時博覧会事務局報告』上巻き、明治35年、667頁。
- 5 女子美術大学所蔵の大正時代の刺繍作品のほとんどに制作年月日および学生氏名が刺繍されている。北区飛鳥山博物館「糸と光と風景と—刺繍を通してみる近代—」平成27年。
- 6 「金閣寺刺繍額」と「銀閣寺刺繍額」については、前回の調査で取り上げた。なお、この2点の刺繍作品については、函館大妻高等学校の池田校長先生のご協力によって、函館大妻創立35周年(昭和34年)に向けて、外山ハツの教えを受けた教員が制作したことがわかった。中川、前掲論文。